



主張

第六七回全日本中学校長会研究協議会

宮城大会の開催に感謝を込めて

榎本智司

あけましておめでとうございます。今年が皆様にとって佳き年となりますことを心からお祈りいたします。

さて、昨年は四月に熊本地震、その後は例年になくさんの台風が日本列島を通過しました。また、十月には阿蘇山の噴火、鳥取地震と続きました。被災された皆様には心からお見舞い申し上げますとともに、被災地の一日も早い復興をお祈りいたします。

東日本大震災以来、全日中として被災三県を訪問させていただいています。昨年は特に津波の被害が甚大だった沿岸部の地域、学校を訪問させていただきました。岩手県の釜石市立釜石東中学校では、一〇〇人を超える生徒さんたちが、「いつかこの海をこえて」という復興に思いを込めた曲を合唱し、私たちを迎えてくれました。その美しいハーモニー、復興への力強い思いに、思わず胸が一杯になってしまいました。しかしながら、生徒たちや地域の方々の復興への熱い思いの一方で、発災五年を経過した現在も、被災地、被災校ともにまだまだとても厳しい状況にあり、支援の継続と更なる対応が必要と痛感せずにはいられない訪問となりました。

このような中、第六七回全日本中学校長会研究協議会宮城大会が、十月十九日から二十



一日まで仙台市で開催されました。東日本大震災以降、東北地区で開催された初めての大会となりました。全国から二、〇〇〇人を超える会員が一堂に会し、熱心な研究協議が行われ、成功裏に終えることができました。宮城県と仙台市の校長会の皆様が強固な連携のもと、東日本大震災発災後の復旧、復興の時期から精力的に準備を進めていただいた大会でした。関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

さて、次期学習指導要領は、三月までに告示され、中学校では平成三十三年度から全面实施されることになっています。

最近では、第四次産業革命といわれ、人工頭脳の急速な進化が人間の職業を奪うのではないかといった指摘もされています。

このような時代にあつて、私たち校長に求められているのは、学校教育が長年培ってきた変化の激しい社会を生きるために必要な力である「生きる力」や、その中でこれまでも重視してきた知・徳・体の育成ということの意義を、加速度的に変化する文脈の中で改めてとらえ直し、しっかりと發揮できるようにしていくことと考えています。

校長に課せられている使命には大きなものがあります。私たちは実践もあり理論もある有言実行の教育の実践的専門家集団として、生徒たちがより良い社会と幸福な人生の創り手となっていけるよう、今年も積極果敢に教育改革に取り組み、充実した学校経営を推進していこうではありませんか。

(全日本中学校長会会長・新宿区立新宿中学校長)